第1章 金融マーケットを知ろう

1 金融マーケットの基本 …… 2
2 景気と金融の関係 …… 4
3 債券市場の見方 …… 6
4 株式市場の見方 …… 8
5 外為市場の見方 …… 10
6 金融派生商品市場の見方 …… 12
7 景気循環の考え方 …… 14
8 景気と株価、金利、為替の動向 …… 16
9 物価が変動する理由は？ インフレ・デフレとは？ …… 18
10 「四季報」はここに注目しよう …… 20
11 金融に関する法律 …… 22

第2章 財政政策と金融政策を知ろう

1 財政政策と金融政策の基本 …… 26
2 中央銀行が担う3つの役割 …… 28
3 金融政策〜公開市場操作を中心に行われる …… 30
4 財政政策〜公共事業を中心に行われる …… 32
5 財政政策・金融政策と金利の関係 …… 34
6 財政政策・金融政策と株価の関係 …… 36
7 財政政策・金融政策と為替の関係 …… 38
8 世界の金融政策が世界経済に与える影響 …… 40
9 投資家保護のしくみ …… 42
10 金融システムを守る国際ルールや国際金融規制 …… 44

第3章 毎日のニュースから マーケット動向を読み解こう

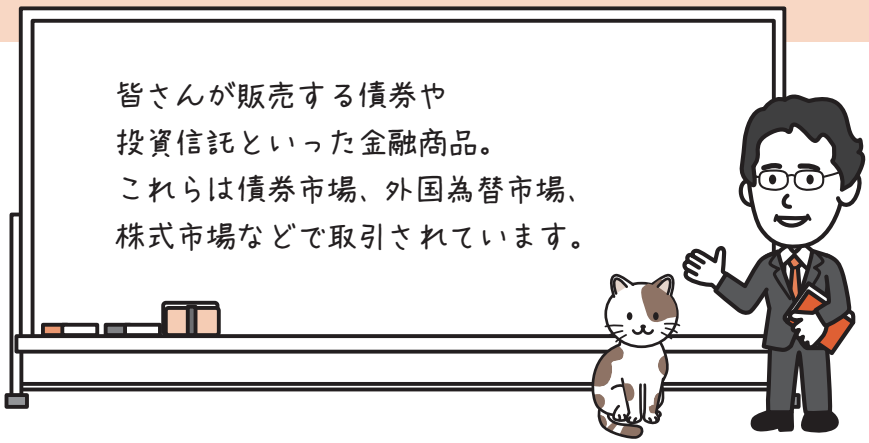
1 日常的にどんな情報をチェックしておけばいい？ …… 48
2 情報を読み込む力を身につけるには …… 50
3 通勤時間、スマホでここまで確認してみよう …… 52

4 なぜ金融マーケットは変化するのか？
どのように変化するのか？ 54
5 経済指標と金融統計が伝えてくれること 56
6 経済指標～景気動向指数と日銀短観 58
7 経済指標～ GDP と経済成長率 60
8 経済指標～米国の雇用統計と ISM 製造業景況指数 62
9 経済指標～物価指数 64
10 経済指標～ドイツの Ifo 景況感指数と ZEW 景況感指数 66
11 株価指標～ PER（株価収益率） 68
12 株価指標～ PBR（株価純資産倍率） 70
13 株価指標～配当利回りと配当性向 72
14 株価指標～ ROE（自己資本利益率） 74
15 どんなニュースが株価や金利などに影響を与えるのか？ 76
16 企業再編ニュースはマーケットへどのように影響するのか？ 78

第4章 金融マーケット情報と金融商品の関係

1 金融マーケットの変動は金融商品の価格にこんなふうに影響する 82
2 株価の変動要因 84
3 債券価格の変動要因 86
4 不動産価格の変動要因 88
5 資産運用の考え方 90
6 資産配分の考え方 92
7 積立投資による効果 94
8 金融マーケット感覚を活かしてお客様へ商品を提案する 96
9 景気の動きにあわせた運用の提案～好景気時 98
10 景気の動きにあわせた運用の提案～不景気時 100
11 将来の人口減少を見据えた資産運用の提案 102
12 アフターフォローの考え方～ iDeCo を例に考える 104

1 金融マーケットの基本



各マーケットが相互に影響しながら動いている

▶大きく分けて５つのマーケットが存在する

皆さんが販売する金融商品は、金融マーケットで取引されるものです。金融マーケットとは、特定の金融商品が売買される市場のことを指します。また、金融市場と呼ぶ場合には、資金の貸し借りをする市場としてとらえることもあります。

金融マーケットには大きく分けて５つあります。

５つとは、**短期金融市場**、**債券市場**、**株式市場**、**外国為替市場**、**商品市場**★です。こうしたマーケットは、それぞれ独立しているわけではなく、相互に影響しあいながら動いています。

★ 厳密にいえば、商品市場は金融マーケットではないものの、運用商品として登場するため、金融マーケットに入れています。

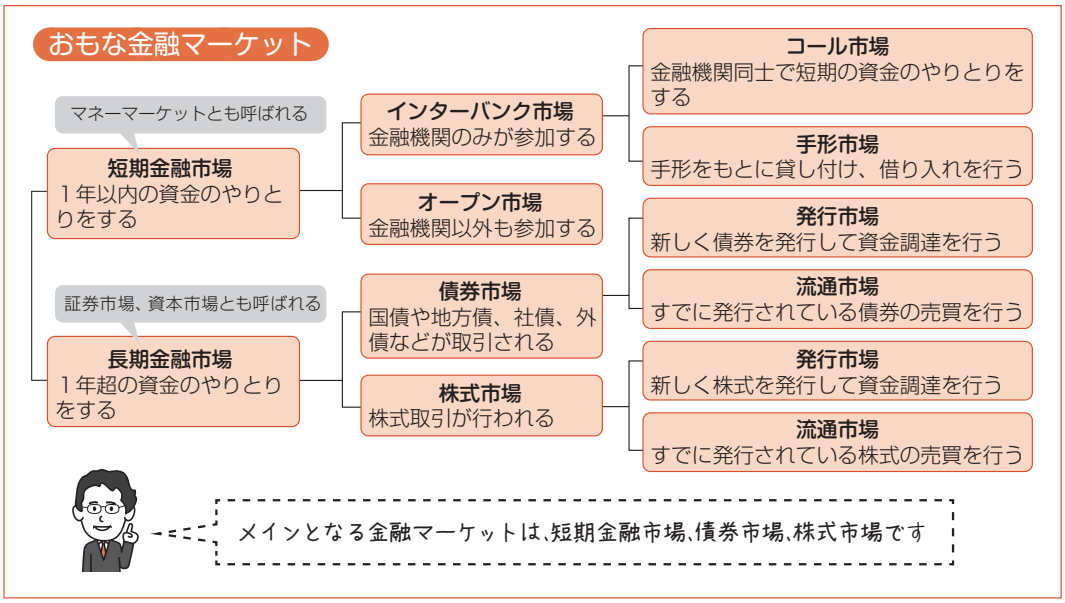
▶各マーケットの意味合いを理解する

短期金融市場とは、１年以内の資金のやりとりを行う市場です。**金融機関のみが参加するインターバンク市場**と**金融機関以外も参加できるオープン市場**から構成されます。このうちインターバンク市場には、**銀行等の金融機関同士で短期の資金の貸借が行われるコール市場**、**手形市場**などがあります。

債券市場では、国債や地方債、社債、外債などの債券が取引されます。

株式市場は、**新しく株式を発行して資金調達を行う発行市場**と、**すでに発行されている株式の売買を行う流通市場**の２つから構成されています。

これら３つの短期金融市場、債券市場、株式市場では、必要とするところへ資金供給を行う役割があり、これらの資金が設備投資や企業経営に活用されることで、さらなる成長を遂げるための処方箋となっているのです。



外国との取引に必要不可欠なのが外国為替市場

▶平日は24時間、世界のどこかで取引されている

外国為替市場では、外国為替の売買が行われています。米ドルやユーロなどさまざまな通貨が、平日では24時間どこかで取引されています。為替においても、金融機関同士が取引するインターバンク市場と、金融機関と顧客との間で取引を行う対顧客市場の２つに分かれています。

商品市場では、貴金属や農産物、水産物、エネルギー等の特定の商品または商品指数の取引などが行われています。具体的には、金や商品ファンドなどの取引が該当します。

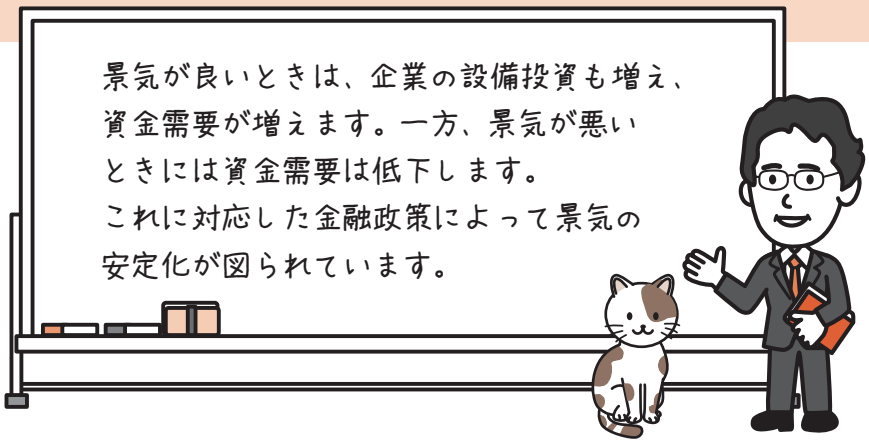
▶それぞれの動きを追い、金融を直に感じることが必要

こうした金融マーケットは、相互に影響するほか、経済情勢、政治、国際情勢などによって変動します。そのため、「なぜ今、上昇しているのか？」「なぜ円安になっているのか？」など理由を探りながらそれぞれの金融マーケットの動きに注目するようにしてみましょう。そして、こうした動きをもとに、どのマーケットがどんな理由で変動しやすいのかを理解できるようになると、金融を直に感じ取ることにつながり、皆さんのコンサルティング力向上などに役立つことでしょう。

こうした経験値はすぐに向上するものではありません。日々の努力が積み重なることで、できあがっていきます。本書の最終的なねらいは、次の２つです。

- 新聞やニュース、経済指標の発表などをもとに、日々のマーケット動向を追えるようになること。
- 日々のマーケット動向をお客さまに説明でき、予想できるようになること。

2 景気と金融の関係



景気の状況で資金需要が変わる

▶景気が良いと資金需要は増加する

景気は良いときもあれば悪いときもあります。循環しながら、経済は成長しています。この流れで、金融も変動します。

まず、景気が良いときには、消費が活発化します。モノが売れ、その結果、企業の売り上げも増加します。企業の収益が拡大すると、それにともない給料も増加します。さらに消費の拡大が見込めます。そこで、企業は、さらにモノやサービスを提供するために事業を拡大することを検討します。そのために、融資や債券発行、株式発行を検討し、資金調達を図ります。家計も消費が旺盛になり、住宅などの高額商品の購入も増加することになるでしょう。

こうして、景気が良いときには資金需要は増加します。資金需要が増加すると、需要と供給の関係から、金利は自然と上昇します。こうして**消費増加→投資増加→資金需要増加**といった流れができ、景気が良いときには金融が大きな役割を果たすことがわかります。

▶景気が悪いと資金需要は低下する

一方、景気が悪化している場合には逆の現象が発生します。景気が悪化すると、消費は抑制されます。その結果、モノは売れなくなり、企業の売り上げが減少します。企業収益が低下すると、それにともない企業は、費用削減、設備投資を減らすといった行動に出ます。給料も下がる可能性があります。企業だけではなく、家計の財布の紐も固くなることでしょう。

こうして、景気が悪いときには資金需要は低下します。資金需要が低下すると、今度は逆に借り手が減るため、金利は自然と低下します。こうして**消費抑制→投資減少→資金需要低下**といった流れができるのです。

景気と金融の関係

好況期

企　業	資金需要の増加
個　人	消費の増加
金融機関	貸し出しの増加

金利上昇

不況期

企　業	資金需要の低下
個　人	消費の抑制
金融機関	貸し出しの減少

金利低下

景気の良し悪しによって貸し出しに影響が出るため、景気は金融機関の収益に影響を与えることになります

景気の調整は金融政策が担っている

▶景気の過熱には金融引き締め政策により対応している

景気がほどよくよければ、経済成長も順調に推移することでしょう。しかしながら、時として景気が過熱しすぎる場合があります。いわゆるバブルと呼ばれる状況です。資金需要が旺盛で、借り入れを増やし、投資を実行する。こうしたなかで、株価が本来の水準よりも明らかに乖離（かい り）したり、不動産価格が大幅に上昇するといったことも起こり得ます。

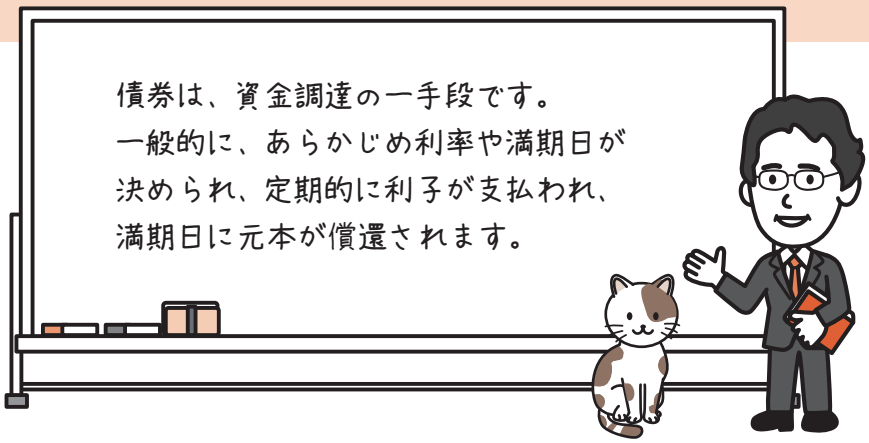
こうした行き過ぎた状況から、本来あるべき姿へと修整するために、日本銀行は金融引き締め政策により景気を調整しています。

▶景気の悪化には金融緩和政策により対応している

景気が悪化している場合には、さらに悪化しないように日本銀行は金融緩和政策によって対応しています。景気の悪化は、給料の減少を通じ、さらに消費縮小、設備投資縮小といった悪循環をもたらし、デフレーションを引き起こす可能性もあります。失われた20年といった言葉がありますが、日本ではこのデフレにより賃金が上がらず、苦しんだ経験があります。

こうした悪循環を緩和させ、本来の水準へ戻すために、金融緩和は行われています。詳細は第２章に譲りますが、景気と金融は密接な関係があり、日本銀行の金融政策により安定的な景気となるよう調整が図られているのです。

3 債券市場の見方



資金を借りる手段としての債券発行

▶金利低下時には債券発行を検討する企業も多い

債券は、一度にまとめて資金を借りることができる手段です。

満期日（償還日）に元本を返済すればよいため、一定期間、計画的に調達資金を利用できます。また、融資では審査をもとに金融機関から借り入れますが、債券は広く一般投資家から資金を募ります。10年間など比較的長期で資金を借りることもでき、さまざまな発行方法があるため、返済期限や利率はその時々の発行時期、発行手段によって異なります。

金利低下時には、返済総額を抑制するため、まとめて資金を確保しようと債券発行を検討する企業も多数あります。

▶ほとんどの債券が店頭市場で売買されている

債券の多くは、店頭市場で売買されています。**店頭市場とは、証券取引所を介さず、銀行や証券会社の窓口などで売買する市場を指します**。債券の99％は、店頭市場で売買されているといわれています。そのため、証券取引所で売買を行う取引所市場は、おもに株式の売買のための市場となっています。

債券は、資金の動きに関して２つの市場から構成されています。その２つとは、**発行市場**と**流通市場**です。

新しく債券を発行する市場を発行市場と呼びます。一方、**すでに発行されている債券を売買する市場を流通市場**と呼びます。この２つの市場は相互に関連しており、新規での購入のほか、債券保有中に売買も可能としています。なお、満期前に売買を行い時価で売却することも可能ではあるものの、時価での売却の場合、元本割れとなり損失を被る可能性もあります。

代表的な格付け機関の格付け

ムーディーズ	S&Pグローバル・レーティング	元本・利子支払いの確実性	
Aaa	AAA	最も確実性が高い	投資適格債券
Aa	AA		
A	A		
Baa	BBB		
Ba	BB		投機的債券
B	B		
Caa	CCC		
Ca	CC		
C	C		
—	D	最も確実性が低い	

発行量が最も多いのは国債

▶信用度が最も高いのも国債

債券市場では、国債をはじめ、地方債、社債、外債といった債券が売買されています。これらの債券の中で、**最も発行量が多いのは国債**です。国債は、国が借りる資金調達手段であり、債券の中で最も信用度の高い位置に属しています。機関投資家などプロを中心に、億単位の売買が行われています。

なお、債券は個人で購入できるものもあります。たとえば、個人向け国債は個人に限定して発行されています。個人向け国債では、額面１万円単位で購入が可能です。**10年満期で変動金利**のものと、**５年満期および３年満期のもので固定金利**のもの、３種類の個人向け国債が存在します。

▶格付けにより発行体の信用力を評価する

貸したお金は必ず返済されるのか？　――時には債務不履行により返済されないこともあります。

債券の発行体を信用してよいのか？　――その度合いを把握するため、債券に関しては、信用リスクを図る手段として格付けが付与されることがあります。

格付けとは、外部の第三者機関である格付機関が発行体の返済能力を判断するものであり、アルファベットの記号を用いてランク付けをしたものです。たとえば、S&Pグローバル・レーティングでは、AAA、AA、A、BBB、BBといったAAAからDまでの評価基準があります。S&Pの最上位の格付けがAAA（トリプルエー）で、債務を履行する能力がきわめて高いと評価されます。そして、最も低い評価がDです。こうした格付けの尺度はグローバルに利用されています。投資家は投資を行う際、格付けを目安としています。